

## 「真の礼拝者」

ヨハネの福音書 4:19~42

### 1. 父

4:19 女は言った。「先生。あなたは預言者だと思います。」

この女性の中に、サマリヤ人たちの神様に対する知識のなさが表されています。まずイエシュア、すなわちメシアを先生、または預言者の一人としてしか捉えていないということです。しかし彼女には探究心があります。本当のことが知りたいのです。解らない、という思いと、解りたい、知りたいという思いは必ずしもつながるものではありません。しかしこの女性は、かつて5人の夫があったが、今一緒にいるのは夫ではないという状況を見事に言い当てられたことで、「あなたを預言者と見込んでお尋ねいたします。」というような探究心を態度に表し始めます。

4:20 私たちの父祖たちはこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます。」

彼女の求めはサマリヤ人全体の霊的状态を表すものでした。サマリヤ人たちは、5人の夫に象徴される異教の神々をから離れ、まことの神に立ち返ったのですが、それが一緒にはいるが「夫ではない」という状況に象徴されるように、正しい関係にない、正しい理解を持っていないことが表されています。だからどうすればいいのか教えてほしい、エルサレムではなく、ずっとこの山で礼拝してきた自分たちは間違っているのか、一体何が正しいのかを知りたい、そんな思いが感じられます。

4:21 イエスは彼女に言われた。「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。」

そこでイエシュアはまず夫、つまり礼拝する対象である神様がどのような御方であるかを提示されます。それはわたし、すなわちイエシュアの「父」であると。そしてこれは同時にご自分がその父の子、神の御子であることを示唆しています。更にヘブル語的視点で見ると、このサマリヤ人の女性が質問した礼拝する場所についても示しておられることが解ります。「父」はヘブル語でアーヴ(אב)と言います。神様を直接的に表す文字であるアーレフ(א)と、家、国を意味するベート(ב)が組み合わせられた言葉がアーヴです。つまり父、アーヴという言葉には「神の家、神の国」という意味があるのです。神の国、御国という場所において礼拝されるべき御方、それがあなたがたサマリヤ人が、地上のすべての人が礼拝するべき御方、神様なのだといエシュアは言われているように思います。



### 2. アブラハム

4:22 救いはユダヤ人から出るので、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らない

で礼拝しています。

救いはユダヤ人から出る。この事実、この神様のご計画を知らなければなりません。すなわちこうです。

主はアブラムに仰せられた…地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。(創世記 12:1~3)

アブラムによって、すなわちアブラムの血に連なる者たち、その子孫たちによって地上のすべての人々が祝福される、これが神様の約束であり、ご計画であり、福音です。そしてユダヤ人たちは、このご計画が成就する神の国、御国についての希望、信仰を持った人々でした。それが彼らユダヤ人の父祖、アブラムの持っていた信仰だからです。

ヘブル 11:9~10

信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。

彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。

### 3. 水

4:23 しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。

父、アーヴすなわち御国において崇められるべき御方は、父なる神を崇める存在、すなわち真の礼拝者を求めておられます。真の礼拝者とは何でしょうか。完全無欠の神様が「ください」と求めておられます。これはこのサマリヤの女性との出会いの初めの 4:7 でイエシュアが「水を飲ませてください」と求められたことと関連性があると考えられます。つまりイエシュアが求めた水と、父が求めておられる真の礼拝者がイコール、同じ存在を指し示しているということです。つまり水とは、この真の礼拝者を指していると考えられます。ですから真の礼拝者が何であるかを知るには、この水について知る必要があるということです。聖書の中で水が最初に登場するのが創世記 1:1~2 です。

創世記 1:1~2

初めに、神が天と地を創造した。

地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた。

初めに神様は天と地を創造されました。地はやみにおおわれた大水がありました。この大水という言葉は、ヘブル語でテホーム(תְּהוֹם)で、大水と訳されていますが、水とは異なる存在です。そして水、マイム(מַיִם)は神の霊の下にあった、つまり神様が水とともにおられたことが解ります。そして神様は天を住まいとされ、天におられる御方ですから、水は、神様とともに天にいたことが解ります。つまり水は神様とともにいる存在です。ヘブル語で水はマイム(מַיִם)、そして天はシャーマイム(שָׁמַיִם)と言います。シーン(שֵׁן)は神様の形を表



す文字です。それがマイムと組み合わせた文字がシャーマイムです。水という存在が天的な存在、神に似た存在、神に近い存在、神様とともにいる存在であることがヘブル語の視点からだとよく解ります。

#### 4. 霊とまこと

4:24 神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」

ここまでの文脈と、そして創世記 1:2「神の霊が水の上を動いていた」というみことばにおいて考えるならば、「神は霊です」という表現は、「神は水と共にある存在である」つまり神は真の礼拝者とともにある御方である、という意味であると考えられます。親は子がいるからこそ親となるのです。神様は崇められてこそ神様なのです。礼拝されない神は神ではありません。ですから神様には礼拝者が必要なのです。

では「霊とまことによって」とはどういう意味でしょうか。「神は霊です」とイエシュアは言われましたから、単純に考えれば、逆もまた然りで「霊は…神です」、ですから霊とは神様を表しています。では、まこととは何でしょうか。まことはヘブル語でエメット(אֱמֶת)です。この言葉が聖書で最初に登場するのが、創世記の 24:27 です。

「私の主人アブラハムの神、主がほめたたえられますように。主は私の主人に対する恵みとまこととお捨てにならなかった。主はこの私をも途中つづがなく、私の主人の兄弟の家に導かれた。」(創世記 24:27)

エメット、まこととは本来アブラハムに対するものであることが解ります。そしてその目的とは、アブラハムの息子であるイサクの花嫁を求めて、アブラハムのしもべが旅をし、その目的を果たすことであることが解ります。つまりエメットには「息子の嫁探し」そして「結婚」と密接なつながりがあり、それは父である神様が、息子、御子であるイエシュアの花嫁を探し求めておられることの型と言えます。つまり「霊とまことによって礼拝する」とは、父なる神様と御子イエシュア、そしてそのイエシュアの花嫁として迎えられる、受け入れられるという意味であり、これが神様のご計画の根幹であると考えられます。

#### 5. 知る

4:25 女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシアの来られることを知っています。その方が来られるときには、いっさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう。」

4:26 イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」

この女性、すなわちサマリヤ人は、メシアが来られることを知っていました。そしてそれを信じ、期待し、待ち望んでいました。だからイエシュアは 4:4 にあるように、ここに来なければならなかったのです。そしてこの女性は、メシアが来られれば、すべてを知ることができるという預言者の言葉を信じていました。

エレミヤ 31:33~34

彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。…人々はもはや、『主を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。——主

の御告げ——わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」

イエシュアがメシアとして来られる時、すなわち御国、メシア王国、千年王国が始まる時、すべての人がイエシュアをその目で見、聖書で約束されていたことがすべて実現するので、伝え聞くのではなく、実体験することができるようになります。ですからもはや第三者に教えてもらうことも、証言してもらうことも、通訳や解説などをしてもらう必要がなくなります。イエシュアによって御国が完成し、すべてが明らかにされ、もはや何も質問する必要がなくなる時の様子が、次の弟子たちの行動に、型として表されています。

4:27 このとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話しておられるのを不思議に思った。しかし、だれも、「何を求めておられるのですか」とも、「なぜ彼女と話しておられるのですか」とも言わなかった。イエシュアのもとに弟子たちに象徴されるユダヤ人も、そしてこのサマリア人の女性に象徴される異邦人もイエシュアのもとに集められます。そこにはもはや敵意も拒絶もなく、イエシュアによって一つとされることが表されています。

## 6. 来て、見る

4:28 女は、自分の水がめを置いて町へ行き、人々に言った。

4:29 「来て、見てください。私のしたこと全部を私に言った人がいるのです。この方がキリストなのではないでしょうか。」

4:30 そこで、彼らは町を出て、イエスのほうへやって来た。

ここに御国における神様と人の関わりの型が表されています。すなわち今の私たちは神様のみことばを「聞く」そして「信じる」ことで神様との関係を築いていますが、御国では4:29にあるように、キリスト、メシアであるイエシュアのおられる所に直接「来て、見る」ことで神様との関係を築くこととなります。ですから御国における私たちクリスチャンの働きは、福音を語る働きから、実際にイエシュアのもとに連れて来る働きに変わることがここに表されていると考えられます。

## 7. 食物

4:31 そのころ、弟子たちはイエスに、「先生。召し上がってください」とお願いした。

4:32 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたの知らない食物があります。」

4:33 そこで、弟子たちは互いに言った。「だれか食べる物を持って来たのだろうか。」

4:34 イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみこころを行い、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」

御国において私たちの肉体を維持するのが食物ではないことが記されています。何より朽ちることのない、老いることも疲れることもない永遠の肉体が与えられれば、食物など必要なくなります。しかし私たち人間は、お腹さえ満たされていればそれで幸せでしょうか。健康さえあればそれで満足でしょうか。誰かと関わり、つながり、受けたり、与えたりすることで自分の存在価値や目的を見出せなければ、人は幸せを感じることはできません。これがイエシュアの言われた「あなたがたの知らない食物」です。すなわち神様につながり、信

頼まれ、遣わされ、そのみこころを行い、そのみわざを成し遂げることによって私たちは生きる、活かされる、それが御国における私たちの姿です。ですから御国において私たちは暇を持って余すということがありません。神様は私たち一人ひとりに最適な役割と場所を用意しておられます。

ヨハネ 14:2~3

わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。

わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。

神様がアダムにエデンの園を守る役割を与えたように、御国において神様は私たち一人ひとりの居場所、相応しい役割を任せてくださいます。そしてそれはどれも必ず成功する働きだということを先ほど述べました。私たちはその成功の喜びを糧として、食物として生きるのです。

## 8. 御国での働き

4:35 あなたがたは、『刈り入れ時が来るまでに、まだ四か月ある』と言うてはいませんか。さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。

当時の小麦や大麦などの穀物類の栽培期間はおよそ 4 ヶ月でした。つまり「刈り入れ時が来るまでに、まだ四ヶ月ある」というのは、要するに今さっき種を蒔いたばかりという状況です。それなのにもう収穫できるというのです。これは御国における私たちの働き、仕事の成果を表していると考えられます。つまり種を蒔いてすぐ収穫できるような働きです。種を蒔いても芽が出なかったり、途中で枯れてしまったりすることがない、絶対に失敗しない、絶対に成功する働きということです。

4:36 すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに入れられる実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。

4:37 こういうわけで、『ひとりが種を蒔き、ほかの者が刈り取る』ということわざは、ほんとうなのです。

4:38 わたしは、あなたがたに自分で労苦しなかったものを刈り取らせるために、あなたがたを遣わしました。ほかの人々が労苦して、あなたがたはその労苦の実を得ているのです。」

そして御国における私たちの働きのもう一つの特徴、それは「ひとりが種を蒔き、ほかの者が刈り取る」つまり他者が収穫して利益を得るために種を蒔いてあげること、100%他者の利益のために働くということです。つまり「受けるより与える方が幸い」な、「互いに愛し合い、仕え合う」世界です。

4:39 さて、その町のサマリヤ人のうち多くの者が、「あの方は、私がしたこと全部を私に言った」と証言したその女のことばによってイエスを信じた。

4:40 そこで、サマリヤ人たちはイエスのところに来たとき、自分たちのところに滞在してくださるようお願いした。そこでイエスは二日間そこに滞在された。

4:41 そして、さらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた。

4:42 そして彼らはその女に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありま

せん。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです。」

イエシュアのことばを聞いた多くのサマリヤ人たちは、イエシュアがメシアであることを信じました。そしてイエシュアはそこに二日間滞在されます。しかし 4:42 では「信じているのではない」とそれを否定しています。信じているのではない…「知っている」のだとサマリヤ人たちは言いました。ここにも御国の型が表されています。たしかに御国に入るには、それを「信じる」、そして待ち望む必要があります。しかし時至って御国に入るならば、もはやそこは見えないものを信じる世界ではなく、「来て、見て、知る」世界です。イエシュアが目に見える形でおられ、聖書の約束が目に見える形で実現している世界です。その時私たちは、もはやそれを信じるのではなく、来て、見て、そして知るのです。